

三美地区で確認された 縄文時代草創期の陥し穴

今から約1万4千年前の縄文時代草創期、日光の男体山が二度にわたって噴火し、噴出した軽石が偏西風に乗って栃木県の中部から茨城県の北部にかけて降下しました。1回目の噴火の軽石が赤褐色の今市軽石、2回目のものが黄色の七本桜軽石で、黒土層と関東ローム層の間に堆積していることから、旧石器時代と縄文時代を分ける鍵層となっています。通常、縄文時代の遺構は、黄色のローム面で黒土の落ち込みとして確認されますが、両軽石の降下地帯では、草創期の遺構に限り赤や黄色の軽石の落ち込みとして確認されるのが特徴です。

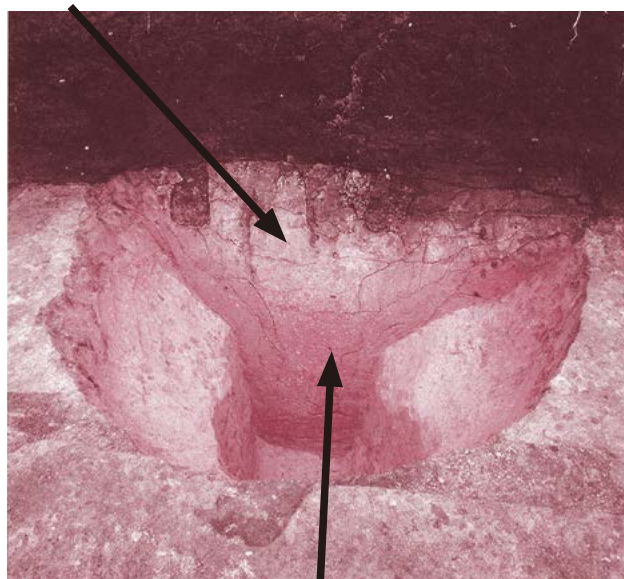
このような軽石を覆土(埋め土)とする陥し穴が初めて確認されたのは、1995年の茂木町の登谷遺跡の調査で、草創期の陥し穴には、楕円型と溝型の2種類があることがわかりました。楕円型は、長さ・深さともに1m強の楕円形の陥し穴で、谷底に集中して配置されることから、主にイノシシを狙ったものと推定しました。溝型は、長さ3m、深さ1m程の溝状の陥し穴です。落ちた獲物が挟まって動けなくなる仕組みのもので、その形や配置状況から、シカを狙ったものと推定しました。

三美地区の那珂川左岸の河岸段丘上では、近年の調査により滝ノ上遺跡と中崎遺跡で縄文草創期の楕円型陥し穴が確認されています。写真1は、中崎遺跡のSK172とした陥し穴の覆土の断面です。下半部には赤褐色の今市軽石を主体とする土、上半部には黄色の七本桜軽石が堆積しており、その上を黒土の自然堆積層が覆っていることから、黒土が形成される以前に埋没していた状況がわかります。写真2は、SK188の完掘状況です。長さ・深さともに1m強で、底部中央に穴が確認されました。この穴には、獲物を殺傷するために逆茂木を立てる場合と、獲物の動きを封じて生け捕りにするために束ねた篠竹をササラ状に立てる場合があり、縄文時代では後者が主流でした。縄文草創期の陥し穴は全国的にみても少なく、両軽石の降下地帯は、それが明瞭な形で確認できる数少ない地域なのです。

考古部会 協力員
茂木町教育委員会
埋蔵文化財専門員
中村 信博

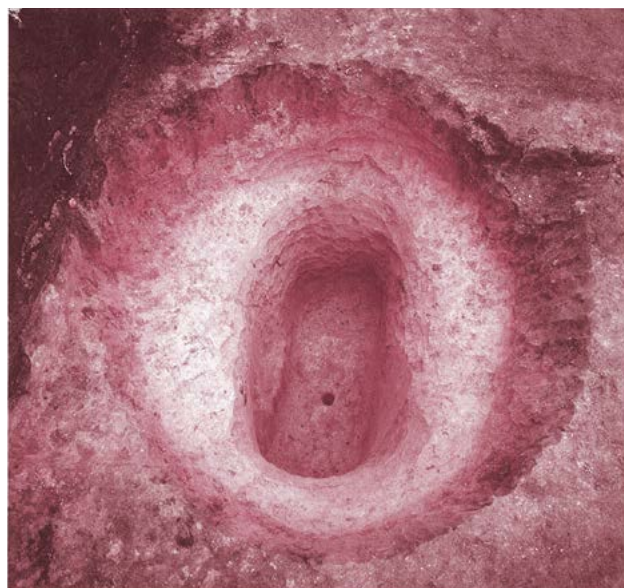


七本桜軽石



今市軽石

▲写真1：中崎遺跡 SK172 断面



▲写真2：中崎遺跡 SK188 完掘状況

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)